AH! OKURIKU
第21号

特集

海外の目から見た北陸

左上： 東茶屋街　右上： 長町の武家屋敷
左下： 東茶屋街に残る昔ながらの商店　右下： 金沢中心部の堅町商店街

支部ニュース「AH!」の第21号をお届けいたします。

今回から座談会のテーマが新しくなりました。「海外の目から見た北陸」というテーマです。北陸で在住している外国からいらしゃった方々に、北陸について多様な視点から自由にお話ししていただこうという企画です。今回は石川支所のお世話でとりおこなわれました。

この座談会によって新しい北陸が再発見できることを期待しています。

海外の目から見た北陸

2001年10月25日金沢工業大学ラウンジにて

出席者：ルイス・バークスデイルさん
　　金沢工業大学　教　授（アメリカフロリダ州）
　郭　清蓮さん
　　金沢工業大学　助教授（中国西安市）
　アズビー・ブラウンさん
　　金沢工業大学　助教授（アメリカ）
司　会：宮下　智裕
　　金沢工業大学　助　手

宮下：今回は、外国から日本に来られ、現在北陸に住み、活躍されている皆様に、海外の目から見た北陸というテーマに沿ってお話していただきたいと思います。文化・風土・街など広く自由にお話していただきたいと思います。

ブラウン：私は、東京・横浜に長く住んでいて、その後金沢に住むようになりました。金沢に来てまず初めに感じたことは、心地よいスケールの街であるということです。もともと日本の伝統的な建築に興味があり日本にやってきたということもありますが、古い寺社や町屋などの魅力的な町並があり、片町や香林坊といった中心街もあり、兼六園や金沢城趾などの緑が豊富にあるオープンスペースがあり、バスなどの交通システムも整っている。都市的な面と田舎の面が程良く混ざっているというような印象を受けました。

今も残る路地空間

鞍月用水脇の歩道

バークスデイル：私の場合は、金沢に住みだして20年になりますが、その前に名古屋に3年ほど住んだ経験があります。アメリカでの大自然の中の生活に対して日本では、生活の刺激みたいなものを期待していたところがありました。名古屋での生活に慣れていたこともありましたが、当時20代の私にとっては、名古屋からの電車に乗りながら、だんだんと景色や空が暗くなり、福井から石川と進んでくるにつれて、電車の中の人もまばらになって駅前におりると、正直、寂しい印象を持ちました。特に20年前は駅前にもほとんど何もないような状態でしたから。

ブラウン：確かに大都市に比べると飲み屋以外の娯楽が非常に少ない感じがしますね。特に金沢は、北陸の中心的な都市としてもう少し華やかなイメージがありました。そういう意味では、大都市が持つ都市の魅力という点では物足りなさを感じます。現在でも少し郊外に出れば田んぼや昔ながらの住宅が続いていますし。でも、それも最初に話したように金沢の一つの魅力かもしれません。事実、私の友人などと話していても誰もが金沢はいいところといいます。いいところというのが日本全国の人たち、さらには訪れた事がある外国人も含めた金沢のイメージなのではないかと思います。

宮下：今お話に出てきた「いいところ」というのは、一体何がいいのだと思われますか？

バークスデイル：いくつかあると思います。一つは、もちろん兼六園や、寺町、茶屋街、武家屋敷などの歴史的なものがたくさん残っていること。それから食べ物が美味しいこと。それから私はもう一つ、歩ける町であるということだと思っています。私もいろいろな日本の都市に行きましたが、町の中で、小道に入ったり、川沿いをあるいたり、時にはお寺を訪ねてみたりと日常の

金沢工業大学　教授
ルイス・バークスデイルさん

金沢工業大学　助教授
郭　清蓮さん

金沢工業大学　助教授
アズビー・ブラウンさん

金沢工業大学　助　手
宮下　智裕さん

生活の中で、ブラブラしながら、楽しめる町は非常に少ないと思います。アメリカはスケールが全然異なっているので車中心ですし、ゆったりとしたスピードで様々な風景に出会えるのは非常に魅力的だと思います。その反面中心部の道が細いことは、交通渋滞などの不便さを生み出してしまっているということも言えます。それでも、人のスケールが残っている事は大きな魅力です。その点では名古屋とは対照的ですね。

ブラウン：そうですね、いろいろなものを見ながら歩いていると、観光のためのポイントだけじゃなくて、所々に住んでいる人たちの生活が見えたりして、そこには昔ながらのものが残っていたりもします。観光地としての金沢だけではなくて、リアルな日本が見れる感じがしていいのではないでしょうか。コンパクトな町の中に歴史的なものと現代の生活とが混ざり合っているといった印象です。空襲を受けていないのも大きな原因だと思いますが。

郭：私も金沢という街には、親しみを感じます。私は、中国の西安で生まれて、日本に来た後も、東京、仙台、福岡、京都と住み、金沢に来ました。金沢の持つ落ち着いた雰囲気、お寺や歴史的なものが、自然に混ざり合っている町並みなど、西安と似ているところもあり、これまで住んだ都市の中で、大変好きなところの一つです。遠くに見える山と共に、色の統一された瓦屋根が続いた町並みなどは大変気に入っています。もうひとつは東京や大阪などの大都市にはない、ゆっくりとした時間の流れがあることも人を引きつける理由だと思います。

宮下：今、日本各地の歴史的な都市では、街本来の良さが失われているといった問題に直面していると思いますが、金沢にはそういった生活に密着した良さが未だ残っているということでしょうか？

ブラウン：そういってもいいと思います。ただし、その一方で、北陸でも郊外型もしくは、アメリカのストリップ型の大型ショッピングモールが数多く建設されて、人々が休日など郊外に流れてしまっているのも事実だと思います。冬の間は、中心部の交通の便が非常に悪くなりますし、大型の駐車場を持ったショッピングモールが便利なのも分かりますが、せっかく歩けるいいスケールを持った魅力的な街があるのですから、幅広い年齢層が楽しめる施設をうまく取り入れれば、より魅力的な街になると思います。

宮下：北陸に歴史的な街の本来の良さが残っている理由はどんなことなのでしょうか？

バークスデイル：最初に話した、電車に乗った時のイメージにもつながるんですが、金沢もしくは北陸という地域は、交通手段も不便な方で、他の地域から比較的アイソレートされている感じがします。大都市からの実際の距離以上のものを感じることがあります。そんなことからも、北陸もしくは金沢という地域の文化の独自性が守られているのではないでしょうか。人を含めた文化の流入、流出が制限されるというのは大きな要因の一つであると思います。

郭：確かにそういう意味では、金沢などには保守的なイメージを持っています。街などで見かける若者のファッションを一つの例に見ても、大都市に比べ落ち着いた感じのものが多いのではないでしょうか。その一方で、保守的なイメージが他の地域の人から見ると、つき合いが難しいといった印象を与えているとも言えると思います。土地や地域といった意識が強いという現れだと思います。

ブラウン：私は北陸の言葉や方言などに強く地域性を感じます。北陸のなかでも地域ごとに全く異なった方言を

浅野川沿いの遊歩道

使っている事も興味深いです。北陸地方では出身地から他の地域へ出ていくことが少ないような気もします。

バークスデイル：金沢の冬の気候も一つの要因でしょう。どうしても外に出ることも少なくなりますし。文化ということでは、外向きというよりもいい意味での内向きの文化なのかもしれません。

郭：素晴らしい工芸品が数多く生み出されるといった職人の文化が金沢で花開いたことも、内向きの文化ということに大きく係わっていると思います。独自の文化や技術などが発展する上で、重要な要素であることは間違えないと思います。確かに冬の暗くて厳しい気候を考えると、人々の生活や建物なども、南国のオープンで陽気な感じに比べてどちらかといえば閉鎖的で守られた感じになると思います。私が金沢が気に入っている一つの理由でもあります。

ブラウン：現在でも金沢を例に採ると加賀百万石という言葉をよく聞きます。歴史的な地域色を示す言葉だと思いますが、現在に至っても一種のプライドみたいなものも持っていて、それが文化や生活などに大きな影響を与えているということなのではないでしょうか。アイソレートされているという事から自然と地域としての感覚が強化されているとも言えるかもしれません。

バークスデイル：北陸の文化や生活は、英語で言う「COZY」という言葉がぴったりくるのかもしれません。これは守られた中の気持ちよさや心地よさといった感じを表現する言葉です。北陸地方というのは、地理的なものも含め、ある程度他の環境から切り離されながら、独自の文化を育てていくそんな地域なのではないでしょうか。

宮下：皆さんのお話を聞いていて、守られること、オープンなこと、伝統的なもの、新しいもの、地域性、時代の流行など、様々な要素をのどのようにバランスをとって行くかが、今後の北陸の文化や生活の発展に大きく関係しているのだと感じました。

それではこのへんで、どうもありがとうございました。

浅野川沿いの美しい風景

歴史的建築物の設計図書や写真などの資料も後世に伝えよう！

バブル崩壊後10年余り過ぎ、景気低迷による閉塞感が漂うなか情報化社会は否応なしに進み、我が国が明治維新以来築き上げてきた政治・経済などの様々な社会システムに変化と歪みが生じてきていることは周知の事実である。このような社会の変化の度合いは、今後もますます高まることは十分予想されることで、それと相まって小泉内閣による構造改革が実行されていくようになると、我が国の産業構造も大きく転換してゆき、ことに建設産業の再編、再構築は必須であろう。そして、こうした社会の急激な変容過程において、過去の文化的蓄積が新しい時代に対応できなくなり、安易に切り捨てられる危険性を孕んでいる。高度経済成長時代やバブル時代の所業を振り返れば一目瞭然である。しかし、21世紀に入った今日、22世紀に繋ぐより良い環境を築き上げるためには、これまでの都市やそれを構成する建築施設・土木施設などの変容の過程を確実に記録（記憶）しておくことが極めて重要であると言える。

平成８年に歴史的な建物を活用しながら保護するための制度として、「文化財登録制度」が導入されてからは、全国各地でこれまで注目されていなかった名もない古い建築物や産業遺産の価値は総じて高まり、市民の間では次第にこうした類の建築物に関心をよせ始めている。そのうえ市民自らの手で歴史的な建物が、実体として記録（保存）されたという事例を耳にすることは光明のひとつである。

そして、願わくは建物の設計図書や文書類、建設当時の写真といった建築関連の資料も収集保存を。こうした資料は建物の情報を単に伝えるのみならず、変容の過程を知る上で重要であり、後世の文化遺産としても貴重である。また止むを得ず取り壊さなければならない場合は、「記録保存」として建物の実測図作成や写真撮影などを行って資料保存を図っていくことも必要で、それが建築文化の継承に繋がり、意義深いことであると考える。

― 金沢工業大学　中森　勉

「水漏れ」が巻き起こすドラマ

私どもの会社は集合住宅（RC造、３～５階建）の緊急修繕を主として行っている。そこで、これまでの長年の経験に、私個人の独断と偏見を交えた話を紹介したい。

いろいろある緊急修繕の中のひとつに「直上階からの水漏れ」がある。『天井から水が漏っている』との連絡を受け現場に急行すると、そこはまるで滝のよう。直上階の部屋に入り、話を聞いても『水をこぼしていない』の一点張り。確かに床は漏れていないのだが。。。。あれこれ調査したが、給排水管の不具合でもなく、外部からの雨漏れでもないようなので、とりあえず１週間様子を見てもらうことに。その後電話すると、もう水は漏らないと言う。ならばまた水が漏ったら連絡してくれとお願いし、終了。しばらく経って忘れたころに、お客様から水が漏ったとの連絡が入る。対処方法は前述と同様。このようなやりとりが何回が続く。他にも同じ事例が何ヶ所かあった。

こうなるとやはり水をこぼした（過失）としか考えられない。よくよく考えてみると面白いことに気付いた。例えば５階建ての場合、上記の事例があるのは殆ど５階（最上階）から４階（直下階）への水漏れの時である。最上階において上からの水漏れは「雨漏れ」であり、水をこぼされる経験がないため、痛みを知らないのである。中間階(４、３、２階)の場合は、こぼしたりこぼされたりお互い様なので、結構正直に過失を認める。逆に１階の人はこぼされるだけの立場なので、すごい剣幕で怒るのである。

以上、かなり強引に結論付けてしまったが、過失の有無はいまだ分かっていない。賛否両論あるだろうが、水漏れの原因も分からずもがき苦しんでいる男の言い訳として、笑って水に流していただければ幸いである。

― 株式会社ハヤシ住工　林　英樹

『設計事務所に入って』

『ものづくりの楽しさをより多くの人々と共有する』事が自身の設計活動において最も重要なテーマの一つになりそうです。

設計事務所に勤め始めて、早くも２年の月日が経ちました。当初から目も回る程の忙しさで、毎日遅くまで仕事をしていました。大学院を中退し、即日社会人になってしまったので、それまでの不摂生な生活からの切り換えがまず大変でした。

１年間ぐらいはほとんど模型作りとコンペに明け暮れ、それまでは手でしか描いた事の無かった図面も、CADを使って描けるようにもなりました。

入所２年目には、基本構想の段階から参加して、初めて住宅の設計をしました。大学の同期の友人は、その頃既に２～３件の住宅を手掛けていたという話も耳にしていたので、俄然ヤル気でした。施主側の都合もあって、基本設計には約半年間も費やしました。（普通はそんなに時間をかけられないのですが）何十通りとプランを練り、その間二転三転しつつも何とか実施設計に入る段階に辿り着きました。知らない事、解らない事も沢山ありましたが、自分で調べ、また先輩方に聞き、打合せを重ねて一つ一つ納めていく作業に楽しさを感じました。そして現場も始まった今日では、自らの手で設計した建物が少しずつ形を成していく様に、学生時代にはまず得られなかった喜びを感じています。

― ㈱宮本忠長建築設計事務所　浜　隆之

K邸スタディ模型（長野市）

小山　智弘、中山　大志（福井大学大学院）

レンズの向こうに見えたもの？『住の遺産』

住の遺産

「建築の仕事は久しぶりであった」、とは言っても出版事業の制作だが、中学生にも住宅建築の魅力を知ってもらおうというのが発行人の目的で、結果として写真集になった。撮影に入ったのは昨年の秋で、快晴の日は毎日のように“建築三昧”を強いられた。

編集だけやっていた頃も“見ていた”はずだが、カメラを持ち歩いて初めて“見えたもの”があったように思われる。難しいことを言うつもりはないが、やはり構図を考え、光と影を計算し、レンズを選んでいるうちに、縁側の床板一枚にも、土壁と板張りの使い分けにも注意するようになる。

浮田家、武田家、秋元家など、県内屈指の住宅建築を見て思うことは、その素朴で豊かな美意識だ。見栄を張るだけの建築にはない温もりがあるように感じられる。それは暮らしに根ざした合理性と機能性を、伝統の技と意匠で造形化したからであろう。無駄も無理もなく、空しい虚飾や虚栄もない。たとえ大袈裟な屋根があっても、それは必要な仕掛けであり、贅沢を怠惰に見せないだけの教養があるように思われる。撮影を終えて思うのは、未来の遺産となるだけのものを“現代”は創り出しているだろうかということだ。「遺産」という言葉にこだわるのは、前世紀後半からつくられたものはあまりにも短命だからである。私は、自分の人生より“寿命の短いもの”をつくるのは犯罪だと自身を常に戒めている。環境問題を持ち出すまでもなく、これは考えてほしいものだ。

住宅の耐用年数は材料や工法で決まるのかもしれないが、現代は「文化的耐用年数」の方に問題があるのではないだろうか。法隆寺を例にあげるまでもなく、文化的価値があれば、腐った柱は取り替えられ、継ぎ足されしてでも遺されることになる。蛇足だが、木造建築はやはり美しい。建材も自然素材の木材、土、紙が一番美しい。たとえ金属を使っても本物として使ってやることだろう。新建材は機能として構造的に隠して使うにはいいが、表面にそのまま用いるのは如何なものだろうか。私はそんなものにレンズを向けたくはない。

—岡田編集写真事務所主宰　岡田徳右衛門順一

塚本　雅則（福井大学大学院）

東京で、ＲＣや鉄骨を使って５０年後のゴミ話かりを造っていました。
自分の描く線に確信が持てなくなり、富山に来て三年目になります。
この祠は、こちらに来て初めて設計し施行したものです。
５０年後、１００年後、ゴミではなく建築であり続けるものを造っていきたいと思っています。

貴方は自分の描く線に確信が持てますか？

佐藤　博（富山国際職藝学院建築職藝科）

『コンペ・プロポの現状報告』

学会の広報誌としましては大変相応しくない『受注に関する現状』を、あえてお話しさせていただきます。

友人の事務所が参加した、ある村での公共建物のコンペでのお話です。提出物は、配置、平面、立面図、パースといった図面と、設計趣旨、概算予算書などで、約3人のスタッフが、約1ヶ月かけて創り上げたそうです。審査は、村会議員全員による100点満点の採点方式であったとお聞きしました。その議員さん方の中には、建築関係の方はおらず、大半が、農業の方であったということです。審査は15時から始まり、17時から議会の別の会議があるということで、わずか2時間の間に6社の審査が行われ、かつ時間があまりないので、全社の点数をつける事が出来なかった議員さんも多くいたそうですが、これを集計し、1位を決め、設計監理を発注したそうです。できあがった建物は、現場で運営される方々の希望と大きく異なっていたため、大幅な変更を加え、コンペの図面とは大きく違った建物となっているとのことです。

最近、公官庁においては、設計入札はほとんどなくなりましたが、コンペ、プロポといいましても、形ばかりで、前記のような審査方法によって発注されているものもあり、外部の有識者の参加はなく、非公開で、当選者の作品の公開もないといったこともあるようです。その上、参加料は、3万、5万、よくて10万円、未だに無料という市町村もあります。こういったことが繰り返されますと、どういった現象が起こるかといいますと、素人受けする建物が巷に溢れ、建物全般のレベルが、素人並になってしまうということです。

この現象を改善しようと、友人がよりどころに考えた組織が、設計事務所の集まりである某協会でした。しかしながら、受注する弱い立場の団体である協会は、幹部、業界の重鎮をはじめ会員の方々は、指名を受けることで精一杯で、改善の具申など、とうてい出来ない団体であることがわかったそうです。

私は発注、受注といった利害関係のない監視機構が必要でないかと考えております。せめて、発注者に提出した作品と同じものを、保管し、参加者に公開するといった役割をする組織、機構、団体が必要であると考えております。例えば純粋な学術的組織である学会は、現状において、最もその様な役割を担える団体ではないかと考え、会員の皆様のご意見を拝聴したいと思います。

コンペ・プロポーザル方式に対する私の意見を述べさせていただき、一石を投じる事が出来れば幸いです。

― 株式会社コンフォルト　海津　正男

シリーズ隠れた建築紹介　旧三松屋土蔵（蔵座敷）

松本城の北東にあたる旧安原町の一角に、擬洋風の一風変わった土蔵がある。材木商を営んでいた三松屋の土蔵で、「蔵座敷」と呼ばれていた。間口5間奥行き2間4尺の規模で、寄棟の瓦葺きの屋根に少し背の高い総二階建。全面に押縁下見板を折釘に掛けてあることが外観の特徴である。また、唐戸の木製大戸で出迎える東側正面入口には、思いっきり洋風の植物模様の浮彫り付きの波トタン葺きペディメントを持ち、二階の窓はすべて上げ下げの硝子窓、その外側には鉄製の鎧窓がついていることも、その希有な外観に更なる味を加えている。「蔵座敷」と呼ばれる所以は、一階に「茶室」と呼ばれる6畳の座敷を備えていることによるが、二階はうってかわって黄色系の砂壁に鶯色の木製ペンキ塗りの巾木に廻縁、洋紙と思われる紙貼天井に木製のランプ吊り、上げ下げガラス窓には日除けロールブラインドを備えるといった内装の、結婚披露宴にも使われたという、サロンっぽい洋室がある。

この一種独特な風貌を持つ土蔵は、松本、いや長野県、いやいや日本が誇る擬洋風建築の代表の一つである旧開智学校を手掛けた棟梁・立石清重の手により、明治25（1892）年に起工、明治27（1894）年に竣工したということが、『蔵座敷建築雑扣』（所有者であった三原氏蔵）に明記されている。立石棟梁は明治28年に亡くなっているので、この蔵座敷は遺作に近いものだといえよう。

残念ながらこの7月より解体され、かの地での老後をおくれなくなったが、現在は各部材が来る移築復原の日まで保管されている状態だ。解体に伴い調査を行い、2001年10月現在とりまとめ最中で、今後事情をご存じの方などへの聞き取りも行っていく予定である。

壁は、一階が真壁の和室、二階が大壁の洋室であるこ

三松屋蔵座敷（松本市）

ともあって、一階は竹小舞ではなく、ナル（小枝）で小舞を掻いて下地をつくってあり、荒壁、中塗り、シックイ仕上げとなっており、二階は木摺にシックイを塗った上に土を中塗りし、砂壁で仕上げてある。太さ６寸近くの柱を四隅に通し、あとは開口部の位置に合わせて少しずらしてあるものの、桁方向はほぼ３尺おき、妻方向は両側で柱の本数が違うので割付けを変え、２尺４寸～３尺の間隔で３寸５分～４寸程の柱に貫を通し、軸組みを構成している。二階には木刷を留めるための間柱がほぼ１尺５寸おきに入っていた。「茶室」は造作の柱を構造の柱の内側に立てており、その間にシックイ塗りの防火窓を入れるなど、手の込んだことをしていた。小屋組は洋小屋で、真束構造になっており、合掌と陸梁はボルトで縫ってある。立石棟梁のメジャーデビュー作・旧開智学校が、明治９年の段階で和小屋であったのに対し、約20年の研鑽を経て、周辺に明治23年の創建といわれる洋小屋の土蔵もあり、すっかり洋小屋を体得したものと思われる。一階は「茶室」以外は、当初は土間であったとのことで、戦時下疎開してきた方を住まわせるために畳敷きの部屋を二間つくるような改造を行っていた。

興味深いこととして、まだ和釘の時代だったのにも拘わらず、すべて洋釘を使用していることがあげられる。二階の天井紙や硝子窓とともに、釘まで輸入品を使用し、より本格的に西洋を意識した様子がうかがえる。他にも当初からの部屋の「茶室」の天井は、オスの板とメスの板を竹の笄で留めるという、珍しいものであるなど、今後詳細を調べていくに従って更なる発見があるかもしれない。興味の尽きない生きた教材の一刻も早い復元整備を願ってやまない。

―文責　降幡建築設計事務所　津村　泰範

いきいき街づくり　路面電車とまちづくり

「ふくい路面電車とまちづくりの会」は，今春３月に発足したまちづくりの任意団体です．会の名称には，「路面電車」と「まちづくり」の２つが記されていますが，「路面電車」という限定性にとらわれず，ひろく公共交通の利用環境とその利用促進を考えながら，住み良い，環境に優しい「まち」をつくっていこうというのがこの会の主旨です．

会発足後まもなく，京福電車の２度目の事故発生にも起因して，その存続問題に関する議論が激化しました．これについては本会からも提言がなされ次第に会の活動も慌ただしくなり，いつの間にか時間が過ぎたという感じです．発足から半年が経った現在，京福電鉄の存続問題からは少しばかり距離をとり，①イベントの企画，②公共交通網にたいする提言，③路線図・時刻表の作成，④各種団体との交流促進などを考えた分科会としての活動が主たるものとなっています．また，会全体としては，各分科会の活動報告の場として，月に一度，準備会と月例会が行われています．

会員は，まちづくりの会という性格上，さまざまな分野の人たちが集まっており，各人がそれぞれの立場から話題を持ち寄り，意見交換がされていきます．先頃行われたトランジットモールの社会実験でのイベント企画もそのようなところから持ち上がりました．この実験に先立って，会では路面電車のペイントの依頼を受け，それに市民にたいする社会実験のPRということを加味して，イベントを企画しました．イベント当日は子供からお年寄りまで多くの人たちの協力を得て，手形でデザインされた電車が完成し，実験期間中，その手形電車は福井駅前駅から福井新駅までのあいだを走ることになったのです．

市民・行政・企業という規定の枠組みから，それをこえたところでの人の繋がりがつくられ，各分野からの意見がひとつにまとまっていくようなそんな会になることをめざして今後も活動を続けていければと思います．

事務局連絡先
918-8031　福井市種池１丁目1905-3
tel&fax 0776-25-7968
e-mail　roba@mbh.nifty.com
http://homepage2.nifty.com/tram-fukui/
（福井大学大学院博士後期課程　村田　一也）

日本建築学会北陸支部ニュース「AH！」第21号
発行日　2001年12月8日発行
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
伊藤　晋栄（新潟）　山下美紗子（富山）
西山マルセーロ（長野）　宮下　智裕（石川）
野嶋　慎二（福井）　菊地　吉信（福井）
事務局　白土　　考・瀬口さゆり
〒920-0863　金沢市玉川町15－1、パークサイドビル３Ｆ
TEL&FAX　076-220-5566